

Constructive Order Theory と選択公理

alg-d

<http://alg-d.com/math/ac/>

2012年4月15日

定義. X を集合とする .

1. $\mathcal{P}_0(X) := \mathcal{P}(X) \setminus \{\emptyset\}$
2. $\mathcal{E}(X) := \{\{x\} \mid x \in X\}$
3. $\mathcal{P}_{\text{fin}}(X) := \{Y \subset X \mid Y \text{ は有限集合}\}$
4. $\mathcal{P}_{\text{fin}}^0(X) := \mathcal{P}_{\text{fin}}(X) \setminus \{\emptyset\}$

これらは包含関係 \subset により順序集合である .

定義. (X, \leq) を順序集合 , $Y \subset X$ を部分順序とする .

写像 $\varphi : X \rightarrow Y$ が contraction である \iff 任意の $x \in X$ に対して $\varphi(x) \leq x$ となる .

定理 1. 次の命題は (ZF 上) 同値 .

1. 選択公理
2. 任意の集合 X に対して , contraction $\mathcal{P}_0(X) \rightarrow \mathcal{E}(X)$ が存在する .
3. 任意の集合 X に対して , contraction $\mathcal{P}_0(X) \rightarrow \mathcal{P}_{\text{fin}}(X)$ が存在する .

証明. (1 \implies 2) X を任意の集合とする . $\mathcal{P}_0(X)$ に選択公理を適用して選択関数 $f : \mathcal{P}_0(X) \rightarrow X$ を得る . このとき明らかに $Y \mapsto \{f(Y)\}$ は contraction である .

(2 \implies 1) $\{X_\lambda\}_{\lambda \in \Lambda}$ を非空集合の族とする . $X := \bigcup_{\lambda \in \Lambda} X_\lambda$ に仮定を適用して contraction $\varphi : \mathcal{P}_0(X) \rightarrow \mathcal{E}(X)$ を得る . 任意の $\lambda \in \Lambda$ に対して $\varphi(X_\lambda) \subset X_\lambda$ である . $\varphi(X_\lambda) \in \mathcal{E}(X)$ だから $\varphi(X_\lambda) = \{x_\lambda\}$ と書ける . $\{x_\lambda\} = \varphi(X_\lambda) \subset X_\lambda$ だから $x_\lambda \in X_\lambda$ となる . よって $(x_\lambda)_{\lambda \in \Lambda} \in \prod_{\lambda \in \Lambda} X_\lambda$ である .

(1 \iff 3) 同様にして AMC \iff 3 であることが分かる . □

定義. (X, \leq) を順序集合, $s \in X$ を部分順序 $Y \subset X$ の上界とする.

s が Y の constructive supremum である

\iff ある写像 $\psi : X \rightarrow Y$ が存在して, 任意の $x \in X$ に対して「 $s \leq x \iff \psi(x) \leq x$ 」となる

命題. (X, \leq) を順序集合として, $Y \subset X$ は constructive supremum $s \in X$ を持つとする. このとき s は Y の上限である.

証明. constructive supremum の定義から, ある写像 $\psi : X \rightarrow Y$ が存在して任意の $x \in X$ に対して「 $s \leq x \iff \psi(x) \leq x$ 」となる. $t \in X$ を Y の上界とすると, 上界の定義により $\psi(t) \leq t$ であるから $s \leq t$ となる. よって s は Y の最小上界である. \square

定理 2. 次の命題は (ZF 上) 同値.

1. 選択公理

2. (X, \leq) を順序集合として, $Y (\neq \emptyset) \subset X$ は上限 s を持つとする. このとき s は Y の constructive supremum である.

3. (X, \leq) を完備束として, $Y (\neq \emptyset) \subset X$ の上限を s とする. このとき s は Y の constructive supremum である.

4. (X, \leq) を powerset lattice として, $Y (\neq \emptyset) \subset X$ の上限を s とする. このとき s は Y の constructive supremum である.

証明. (1 \implies 2) (X, \leq) を順序集合, $s \in X$ を $Y (\neq \emptyset) \subset X$ の上限とする. $x \in X$ に対して

$$A_x := \begin{cases} Y & (s \leq x \text{ のとき}) \\ \{y \in Y \mid y \not\leq x\} & (s \not\leq x \text{ のとき}) \end{cases}$$

と置く. $s \not\leq x$ のとき, x は Y の上界ではないから $A_x \neq \emptyset$ である. 故に集合族 $\{A_x\}_{x \in X}$ に選択公理を適用すると選択関数 $f : X \rightarrow \bigcup_{x \in X} A_x \subset Y$ を得る. この f は明らかに

「 $s \leq x \iff f(x) \leq x$ 」を満たす.

2 \implies 3 と 3 \implies 4 は明らか.

(4 \implies 1) 定理 1 の条件 2 を示す. X を集合とする. $\mathcal{P}(X)$ は powerset lattice だから, $\mathcal{E}(X) \subset \mathcal{P}(X)$ の上限 X は constructive である. 故にある写像 $\psi : \mathcal{P}(X) \rightarrow \mathcal{E}(X)$ が存在して, 任意の $Y \subset X$ に対して「 $X \subset Y \iff \psi(Y) \subset Y$ 」となる. 即ち「 $Y \subsetneq X \iff \psi(Y) \not\subset Y$ 」である.

$Y \in \mathcal{P}_0(X)$ に対して $\varphi(Y) := \psi(X \setminus Y) \cap Y$ と置く. $X \setminus Y \subsetneq X$ だから $\psi(X \setminus$

$Y \not\subset X \setminus Y$ である . 故に $\psi(X \setminus Y) \cap Y \neq \emptyset$ となる . $\psi(X \setminus Y) \in \mathcal{E}(X)$ だから $\psi(X \setminus Y) \cap Y \in \mathcal{E}(X)$ である . よって φ は $\mathcal{P}_0(X)$ から $\mathcal{E}(X)$ への写像であるが , 定義から明らかに contraction である . \square

定義. 順序集合 (X, \leq) が constructively directed である

\iff ある写像 $\varphi : \mathcal{P}_{\text{fin}}^0(X) \rightarrow X$ が存在して , 任意の $Y \in \mathcal{P}_{\text{fin}}^0(X)$ に対して $\varphi(Y)$ は Y の上界である . (この写像 φ を constructive direction と呼ぶ)

定理 3. 選択公理 \iff 任意の有向集合は constructively directed である .

証明. (\implies) (X, \leq) を有向集合とする . $Y \in \mathcal{P}_{\text{fin}}^0(X)$ に対して $A_Y := \{x \in X \mid x \text{ は } Y \text{ の上界}\}$ と置き $\{A_Y\}_{Y \in \mathcal{P}_{\text{fin}}^0(X)}$ に選択公理を適用すればよい .

(\impliedby) $\{X_\lambda\}_{\lambda \in \Lambda}$ を互いに素な非空集合の族とする . Λ は無限集合であるとしてよい . $X := \bigcup_{\lambda \in \Lambda} X_\lambda$ として $\mathcal{A} := \{A \in \mathcal{P}_{\text{fin}}(X) \mid \text{任意の } \lambda \in \Lambda \text{ に対して } |A \cap X_\lambda| \leq 1\}$ と置く . $A \cap \Lambda = \emptyset$ としてよい . このとき $S := \mathcal{A} \cup \Lambda$ の順序 \leq を , $s, t \in S$ に対して

$$s < t \iff \begin{cases} s, t \in \mathcal{A} \text{ かつ } \{\lambda \in \Lambda \mid s \cap X_\lambda \neq \emptyset\} \subsetneq \{\lambda \in \Lambda \mid t \cap X_\lambda \neq \emptyset\} \\ \text{または } s \in \Lambda, t \in \mathcal{A} \text{ かつ } |t \cap X_s| = 1 \end{cases}$$

で定義する . このとき (S, \leq) は有向集合である .

∴) 任意の $s, t \in S$ に対して , ある $u \in S$ が存在して $s \leq u, t \leq u$ とできることを示せばよい .

$A, B \in \mathcal{A}$ とする . A, B は有限集合で Λ は無限集合だから , ある $\mu \in \Lambda$ が存在して $X_\mu \cap (A \cup B) = \emptyset$ とできる . $\Lambda_A := \{\lambda \in \Lambda \mid A \cap X_\lambda = \emptyset\}$ と置く . $x \in X_\mu$ を一つ取り $C := A \cup \left(\bigcup_{\lambda \in \Lambda_A} (B \cap X_\lambda) \right) \cup \{x\}$ とすれば $C \in \mathcal{A}$, $A \leq C$, $B \leq C$ である .

$\lambda, \mu \in \Lambda$ とする . $x \in X_\lambda, y \in X_\mu$ を取り $A := \{x, y\}$ と置く . すると明らかに $A \in \mathcal{A}$, $\lambda \leq A$, $\mu \leq A$ である .

$A \in \mathcal{A}$, $\lambda \in \Lambda$ とする . $\lambda \leq A$ のときは明らかだから $\lambda \not\leq A$ とする . このとき $A \cap X_\lambda = \emptyset$ である . $x \in X_\lambda$ を取り $B := A \cup \{x\}$ と置く . すると明らかに $B \in \mathcal{A}$, $A \leq B$, $\lambda \leq B$ である .

以上により (S, \leq) は有向集合である .

故に仮定により constructive direction $\varphi : \mathcal{P}_{\text{fin}}^0(S) \rightarrow S$ が存在する . $\lambda, \mu \in \Lambda$, $\lambda \neq \mu$ とするとき明らかに $|\varphi(\{\lambda, \mu\}) \cap X_\lambda| = 1$ である . そこで $\mu \in \Lambda$ と $x_\mu \in X_\mu$ を取り , $\lambda \neq \mu$ に対して $\varphi(\{\lambda, \mu\}) \cap X_\lambda = \{x_\lambda\}$ と書けば $(x_\lambda)_{\lambda \in \Lambda} \in \prod_{\lambda \in \Lambda} X_\lambda$ である . \square

参考文献

- [1] Marcel Ern , Constructive Order Theory , Mathematical Logic Quarterly 47 (2001), 211-222,
[http://onlinelibrary.wiley.com/doi/10.1002/1521-3870\(200105\)47:
2<211::AID-MALQ211>3.0.CO;2-U/abstract](http://onlinelibrary.wiley.com/doi/10.1002/1521-3870(200105)47:2<211::AID-MALQ211>3.0.CO;2-U/abstract)